
そして君に惹かれてく…

飴玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうして君に惹かれてく…

【Nコード】

N5868G

【作者名】

飴玉

【あらすじ】

僕の同級生である四月一日美緒は妙な雰囲気を持っている。僕はただのトモダチ。そう思っていたのに、僕は彼女に惹かれていく…。

1『告白』

「先輩、俺と付き合ってください！」

それは僕が『文芸部』と書かれた部屋の扉に手をかけたときのことだった……らよかったのに。

タイミングの悪いことに、それは僕が扉を開けたのとほぼ同時だった。

「……」

気まずい。

中にいたのは文芸部の2年の四月一日わたぬきみお美緒と1年の香田雅樹こうだみやきだった。どうやら香田くんがワタヌキさんに告白している最中だったご様子。

「……香田くん、ごめん」

そう言ったのは僕だ。

もちろんこの気まずい雰囲気能耐えられなくて。

「あら、香田くん……ふられちゃったわね」

ワタヌキさんは口の前に手を当てて笑った。
目が横に細くなって狐のようだ。

「えっと……僕はワタヌキ先輩に言ったつもりだったんですけど……」

「いいわよ」

「え？」

香田くんはぽかんと口を開けた。

「付き合ってもいい……と言ったつもりよ。女の子にそんなことを何度も言わせるものじゃないわ」

ワタヌキさんは妙に年上ぶって言った。

彼女はそれが似合うからいいのだけれども。

「あ、ありがとうございます！」

「これからよろしくね、香田くん」

「はい！」

「さて……萩原くん」

ワタヌキさんは僕の方へ向き直った。

申し遅れたが、僕の名前は2年の萩原稔はぎわらみのるという。どうぞよろしく。

「私たちの用事は終了したわ。いつまでもそこに突っ立ってないで、入ってきていいのよ？」

「ああ、じゃあお言葉に甘えて」

僕は開けっ放しの扉を閉めて、ワタヌキさんが座しているところから一番離れたところに座った。

パイプ椅子がきい……と音をたてたのを聞いて、この学校の歴史の

重みを感じた。

というよりも、新しい椅子が欲しいなどと贅沢なことを考えてしまった。

「じゃあ俺はちょっと野暮用があるんで失礼します」

香田くんはそう言って慌てて出て行った。

二人きりになると、とても静かになった。

聞こえる音と言えばワタヌキさんが文庫本のページをめくる音と、外で運動部の人たちの声、あとは風に揺れる木の葉の音くらいだった。

「ねえ、萩原くん」

おっと、ワタヌキさんの声も追加された。

ワタヌキさんは本に書かれた活字から目を離さずに話しかけてきた。

「何？」

「どうして人は生まれてくるのかしら？」

何の脈絡もない質問だな。

「どうしていきなり？」

「そういうテーマの本を読んだから」

「ああ、なるほど」

「萩原くんはどう思う？」

ワタヌキさんは次のページをめくった。

「……僕なんかより、香田くんといるときの話題に使ったらどうかな？」

「……ふふ、そうね」

ワタヌキさんは立ち上がった。

「じゃあ私は帰るから、部室の鍵をよろしくね」

「ん、気をつけて」

「さよなら」

ワタヌキさんは僕に鍵を預けると、床に置いていたカバンを肩に掛けてさっさと出て行った。

「生まれてくる意味……か」

一人になった部屋の中、僕は考えていた。

じきに、腹が減ってきたので僕も帰ることにした。

2『姉』

翌日の放課後、僕はまた部室に向かう。

前回の失敗があるので、扉を開ける前に二回ノック。

「開いてますよー？」

中から女の子の声がした。でもこの声はワタヌキさんではない。僕は扉を開けた。

「部長、珍しいですね」

窓際の椅子にポニーテールの女の子が座っている。

「『元』部長……でしょ？稔くん」

「そうでしたね、雪先輩」

そう、この人こそ、元文芸部部長である四月一日雪だ。わたぬきゆき

気づいた人もいるかもしれないが、言っておく。彼女はワタヌキさんのお姉さんだ。

とはいっても、この姉妹はあまり似ていない。

「ねえ、最近面白いことあったー？」

先輩は体を揺らし、パイプ椅子をキコキコいわせながら聞いてくる。その姿は子どものようで、妹のワタヌキさんよりも幼さを感じさせる。

「面白いかどうかは判断しかねますが、変わったことならありましたかね…」

「なにになにー？」

「ワタヌキさ……美緒さんが香田さんと付き合いだしました」

「あら、そうなの？」

僕の言葉にさほど驚いた素振りを見せず、雪先輩はカバンから赤いスケジュール帳を取り出した。

「ふーん……なるほど。明日は土曜日だね……」

雪先輩はニヤニヤしながらスケジュール帳を見ていたかと思えば、突然立ち上がった。

「穂くん！ 明日の15時頃……ひま？」

「まあ、特にこれといって予定はないですけど……」

「じゃあ、15時頃に喫茶店『ALICE』に行きなさい。きっと面白いものが見られるわ」

雪先輩は微笑し、机に置いてあったカバンを肩に掛ける。

「雪先輩、面白いものって……」

「見ればわかるでしょ。じゃ、鍵よろしくねー」

雪先輩はひらひらと手を振りながら、出ていった。

……どういつもこいつも面倒な鍵当番を僕に押し付けてないか？

3『砂糖』

そして土曜日の15時前。

僕はほかにすることもないので、喫茶店『A L I C E』に来ている。見たところ何の変哲もない普通の喫茶店だ。店内はそこそこ広く、ボックス席とカウンター席がある。

僕は連れがいるわけでもないのでカウンター席に座り、まだ湯気の出ているコーヒーをちびちびと飲んでいる。

先輩の言っていた時間にはまだ余裕がある。

大きめの窓から差し込んだ光が背中にあたって暖かい。

僕が頬杖をついてうつらうつらし始めたときだった。

チリンチリン……と店の扉が開く音がした。

横目で見ると、見知った二人がいた。香田くんとワタヌキさんだ。

幸い二人は僕に気づかず、ボックス席へ歩いていった。

先輩が言っていた面白いものとはこの二人のことか。まあ、暇つぶしにはいい。

僕は二人の会話が聞こえ、かつ二人には気づかれない席に移動した。そして、ほとんど空になったコーヒーの二杯目を注文した。

二人は学校のことや、この店のことなど他愛もない話題に花を咲かせていた。

僕のコーヒーが半分くらい減った頃、香田くんにはコーヒー、ワタヌキさんには生クリームののったシフォンケーキと紅茶のセットが運ばれてきた。

ワタヌキさんは香田くんの世間話に耳を傾けながら、シフォンケーキをどんどんくずしていく。

香田くんの話をちゃんと聞いているのかどうか、わからないほど夢

中になって食べていた。

そして、香田くんの話に区切りがつき、ワタヌキさんのシフォンケーキがなくなったとき、今度は彼女が会話の主導権を握った。

「ねえ、香田くん」

「何ですか？」

「どうして私が好きなの？」

「え！ど、どどどうしてって！？」

香田くんは顔を真っ赤にして口をパクパクと開閉している。

「どうしたの？ 顔が赤いわ。暑いのかしら」

ワタヌキさんはくすくすと笑いながら砂糖の瓶を手元に寄せた。そして、白い角砂糖をいくつかティーカップに入れた。甘党なのだろうかと、個人的な感想を持つ。

「いえ、大丈夫です！」

「ふふ、質問が悪かったかしら？ なら、私のどこが好きなの？」

「そ……そんな改めて聞かれると照れますって！」

香田くんは顔を赤くしたまま、テーブルの端を見つめる。

「そう」

ワタヌキさんはそんな香田くんを見て微笑むと、紅茶の中で溶け出した砂糖に視線を向けた。

小さなスプーンですくっては落とし、すくっては落とし……。

その、砂糖の様子を見る彼女の目は笑っていなかった。

ワタヌキさんと香田くんはそのあと喫茶店『ALICE』を出ていった。

なので僕の密かなのぞきはここで終了することになる。

だが、どうしても気になることが一つ。

ワタヌキさんのあの砂糖を見る目はなんだったんだ？

恋人を目の前にしてするようなものだろうか？

あれはまるで、ケーキを一口だけ食べて「ああ、この程度か」と思
い、食べるのを止めたような目だったのだ。

4 『好意』

月曜日の朝。

僕は駅から学校までの道を黙々と歩いていた。

ふと前を見ると、黒髪を肩くらいまでのばした女の子の後ろ姿が目に入った。

身長は低めで姿勢がいい。

……ワタヌキさんである。

「おはよう、ワタヌキさん」

僕が声をかけると、ワタヌキさんは振り返った。

「おはよう、萩原くん」

僕らはそのまま隣を歩くように、歩調を合わせる。

当然、僕とワタヌキさんでは歩幅が違う。歩調を合わせるというだけでなく至難の業である。

「香田くんと一緒に登校とかしないの？」

「ええ。一緒に行く必要もないでしょう？」

どうしてそんなことを聞くんだというような顔のワタヌキさん。

「……ワタヌキさんって、香田くんのこと、好きなの？」

「どうして？」

疑問に疑問で返された。

「なんだか、香田くんに冷たいなーと思って」

「優しくするばかりが恋人というわけではないわ。それに見たでしよう？ 昨日のこと」

「昨日……」

「『ALICE』で」

「えーっと……」

ばれていたか。

「誤魔化さなくてもいいわよ。仕方ないわ。世界は狭いもの」

どうやら、偶然いたものと思っているらしい。

僕にとってはそのほうが都合がいいので何も言わないことにする。

「二人で遊びに行ったりもしてる。それで十分じゃないの」

「そうなのかな？」

「それにあんまり一緒にいると、疲れるじゃない」

疲れる？ そんなの、好き合っている二人から出てくるようなセリフか？

そうこうしているうちに学校に着いた。

「私、部室に忘れ物してるから」

ワタヌキさんはそう言って、教室と逆方向へずんずん歩いていった。小さな背中は部室棟へと消えていった。

結局、香田くんのが好きなのかどうか……答えてくれなかったな。

なんだか上手くかわされた気がする。

……って、僕は何を気にしてるんだ。

ワタヌキさんと香田くんの関係なんて僕にはどうでもいいはずなのに……。

そう……この頃から僕はこの、他の女の子とはどこか違う、ワタヌキさんのことが気になっていたのだ。

だが、僕はまだこの気持ちは何なのか理解できていなかった。

5『苛立ち』

放課後、部室に行くと香田くんがいた。軽く会釈してパイプ椅子に座る。

なんというか……沈黙。

運が悪いな……。

香田くんが嫌いなわけじゃない。それでも、二人きりになるのには苦手なタイプだ。

とりあえず、間をつなぐためにどうでもいい質問をなげる。

「あー……えーっと、もう手つないだりしたわけ？」

別に知りたくもないことを香田くんは照れながらも話してくれる。

「いえ、実はまだなんです。僕はまだそんな度胸がなくって。それに美緒先輩はおとなしいし、そういうのって疎そうじゃないですか」

そう言いつつも、幸せそうに話す香田くんは見ていて、微笑ましかった。

しかし突然、第三者があらわれた。

「私のことを知ったような口を聞かないで」

気がつくのと、部室の入り口にワタヌキさんが立っていた。

「あなたと私は他人。つまりは、他の人間なのよ」

無表情に淡々とそう言うワタヌキさん。

何か気に障ることでもあったのだろうか？

そのただならぬ空気に、僕と香田くんは黙ってワタヌキさんの言葉を待つしかなかった。

「簡単になんでもわかったら……違う人間でいる意味なんてないのよ」

ワタヌキさんは香田くんを冷たい目で見た。

「香田くん。悪いけど、私たちが付き合っている意味はないと思うわ」

「そんな！」

確かに、香田くんはひどい言われようだった。

意味がないだなんて、言い過ぎじゃないだろうか。

「『付き合ってください』って言ってきたのは香田くんよ。私にはそれを断る権利がある……そうでしょう？」

「それは……」

香田くんは今にも泣き出しそうな表情でワタヌキさんを見ている。

「じゃあ、さようなら。香田くん」

ワタヌキさんは香田くんに微笑むと、僕のほうを一瞥して背を向けた。

そして、そのまま来たばかりの部室をあとにした。

「あーらら。ふられちゃったわねえ、香田くん」

いつの間にか雪先輩が部室内にいた。

「先輩……いつからそこに？」

「世の中には知らなくていいことがたくさんあるのよ」

つまり、窓から入ったんですね。

「ま、香田くん。美緒のことは諦めなさいな」

「……帰ります」

香田くんはうつむいたまま、去っていった。

「まあ。美緒だものね」

雪先輩はそう呟くと、窓から出て帰っていった。

……だから窓から出るなって。

6『別れ』

「おっはよー！」

さわやかな朝の挨拶は背中の中のしばかれる音とともにやってきた。
僕は声にならない悲鳴という言葉の意味を正しく理解した。

「雪先輩……暴力はやめてください」

「あら、そんなことよりビッグニュースよ。香田くん、文芸部辞めるんですって」

嬉々として語る雪先輩がなぜだか気に障った。

「そうなんですか。ていうか、人の不幸を喜ぶなんて歪んでるんじゃないですか？」

なぜかはわからないが苛ついた。僕はこんなマトモなことを言っているほどの人間じゃない。

それに二人が別れた時点でこんなことになるのはわかっていた。
僕の言葉に雪先輩は笑って答えた。

「あなたもね」

「は？」

「きっと」

気持ちの悪い笑みだった。

「人の不幸を喜んでいるのは、私だけじゃないんじゃないかしら？」
意味深な言葉を残して、雪先輩はポニーテールを揺らしながら去っていった。

僕が喜んでいても言いたいのか？
イミガワカラナイ。二人が別れて都合のいいことなんて……。

「おはよう、萩原くん」

いきなり後ろからワタヌキさんの声がした。
やはり、言っておくべきだろうか。

「香田くんのことなんだけど……」

「何？」

「文芸部、辞めるみたいだよ」

「あら、そう」

まるでお天気の話聞き流すかのよう。ワタヌキさんにとっては、同じレベルのことなのだろう。

「ねえ、ワタヌキさん」

「なに？」

「香田くんに飽きたの？」

その言葉を聞いて、ワタヌキさんは悲しそうに微笑んだ。そして、首を横に振る。

「はじめから……そう、はじめから冷めてたわ。彼を特別に思ったことなんてない」

これは、砂糖を見ていた目と同じだった。

「なら、どうして付き合ったりなんかしたの？」

「……断る理由もなかったから」

思わず笑ってしまった。

「キミは悪女だね」

僕の言葉に目を丸くするワタヌキさん。しかしすぐに淡白な表情に戻った。

「失礼しちゃうわ」

しかし口元の微かな緩みを僕は見逃さなかった。

早足でさっさと先を歩いていったワタヌキさんはいつもと変わりなかった。

かといって、僕は彼女のすべてをわかっているわけでもないのだが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5868g/>

そして君に惹かれてく…

2011年10月5日21時23分発行